テキストマイニングから探る「大正期ベルクソンブーム」の内実

中原 真祐子（上智大学 基盤教育センター） 永崎 研宣（人文情報学研究所）

概要：フランスの思想家 Henri Bergson が日本に紹介された明治末から大正初期にかけて，本邦ではベルクソン思想の流行が起こった．本研究は，その流行がどのような関心のもとで成立したのかをテキストマイニングから探る試みである．1910-15 年に発行されたベルクソンを主題とした論文・書籍に NDLOCR を用いて光学的文字認識処理を行い，得られたテキストに対して KH Coder でテキストマイニングを行った．そしてベルクソンに対する学術界と在野批評家との関心の違いを比較した．その結果，カントを比較対照項としてベルクソンを受容していたアカデミアの研究者と，「生命」や「生活」といった概念に注目していた在野批評家たちという傾向の違いが明らかになった．
キーワード： テキストマイニング，KH Coder，大正時代，ベルクソン，日本におけるベルクソン受容，思想史

Text Mining of the Taisho Period's "Bergson Vogue" in Japan

Mayuko Nakahara (Center for Liberal Education and Learning, Sophia University),
Kiyonori Nagasaki (International Institute for Digital Humanities)

Abstract: The philosophy of Henri Bergson, introduced in Japan during the late Meiji and Taisho periods, caused a vogue in the 1910s. This study determined what interests supported this trend based on text mining. For this purpose, we conducted OCR (using the NDLOCR program) of articles and books published between 1910 and 1915 that mainly discussed Bergson, after which we text-mined the data using the KH Coder software. We then compared the differences between the interests in Bergson of scholars and non-academic critics. According to the results, there was a difference between the academics, who accepted Bergson in comparison with Kantian philosophy, and the non-academic critics who received focusing on the concept of life in Bergsonian philosophy.
Keywords: Text mining, KH coder, Taisho period, Bergson, Bergson's reception in Japan, History of Philosophy

１．研究の背景と目的

フランスの哲学者 Henri Bergson (1859-1941)が，日本で本格的に紹介されたのは 1910（M43）年のことである．日本では明治末から大正の初めにかけての一時期，ベルクソンに関する論文や書籍が多数公刊された．夏目漱石が 1914 年に行った講演「私の個人主義」で言及しているように，ベルクソンの思想は，論壇において「流行」とも言うべきものとなっていたのである[1].

本研究は，その流行がどのような関心のもとで成立したのかをテキストマイニングから探る試みである．

大正・昭和期のベルクソン受容を研究した宮山昌治によれば，1912（T1）年から 1915 年にかけて「ベルクソンの大流行」が起こった[2]．とりわけ 1913（T2）年には，短い紹介文も含めれば 50 件以上の記事，書籍が出版され，流行のピークが形成された．そして，1915（T4）年ごろに流行は急速に衰退したという[3]．この流行の特徴は，大学に所属するアカデミズム内の専門哲学研究者だけではなく，在野の知識人たちが数多く参加していたところにある[4]．ベルクソンという西洋の哲学者を，正統的な研究者のみならず，ジャーナリストや評論家といった在野の論者たちがこぞって論じる状況が発生していたのである．アカデミズムの枠を超えて生じたベルクソン受容の担い手たちは，その思想のどこに魅力を感じていたのだろうか．その関心の所在をテキストマイニングから探ることが本研究の目的である．

２．研究の意義

本研究の意義は，上述の課題に取り組むことで思想史研究そのものに貢献することとともに，思想史研究におけるテキストマイニングの方法論を提示する点にもある．思想史研究において，テキストデータベース作成や検索などはこれまでも広く利用されてきたが，思想的文献に対してテキストマイニングを用いた研究はあまり行われてこなかった．

一般に思想史研究は，過去に記された文章を読み，当時の社会情勢などと併せて考察し，整合的な解釈を行うという仕方で進められる．つまり対象としたテキストに対して，研究者が精読をし，思考するという方法が伝統的にとられてきた．それゆえに，対象とするテキストの量は，研究者が身体的・時間的制約のもとで扱える量に限られるという限界があることになる．

2000 年代に入って，文学研究の領域では， F. Moretti が精読による研究手法には限界があることを指摘し，「世界文学」研究を構想するにあたって「精読 close reading」だけではなく，大胆な図式化やデジタル技術を用いた「遠読 distant reading」の試みの必要性を提唱した[5]. Moretti が問題とした状況は，思想史研究においても共通していると考えられる．

©2022 Information Processing Society of Japan

日本においては，明治期以降急速に近代化が進み，識字率と就学率の向上を背景に[6]，大正期から出版点数も爆発的に増えた[7]。それにより、多くの思想的テキストが活字として残されるようになった．そうした歴史的背景に加え，21 世紀に入ってからは，資料のデジタル化が進展し，とりわけ近年，国立国会図書館等で明治・大正期のテキストの電子化が進んだことで，資料へのアクセスの利便性が格段にあがった．思想研究においても，大量のテキスト群に適用可能な研究手法について，検討を開始する時期に至っていると著者らは判断した．デジタル技術を用いた思想研究は，今回検討の対象とする流行現象のように，思想テキストを「群」として捉えるような場合に，とりわけ有効性を発揮するように思われる．

そこで，今回は，思想史研究でテキストマイニングをいかに活用できるのかという関心のもと，データ取得や分析のワークフローを検討しながら，思想史的問題に答えを与える手がかりを探る．

３．先行研究と作業課題

ベルクソン流行の理由を考察した宮山昌治は，この流行は，新カント派の流行に対する「反動」として登場したと述べている [i]．「カント的哲学対ベルクソン」という構図は，ベルクソンを本邦に紹介した西田幾多郎の論考や[8]，九鬼周造が 1928 年に発表した論考[9]などにも現れており，流行の当時から，哲学研究者たちにとってそのよう理解されていたものと思われる．

そこで，本研究は，宮山の読解を主たる手引きとして，テキストマイニングからも同様の傾向を引き出すことができるかを作業課題とする．

４．分析の対象及び研究方法

大正期のベルクソン受容の特徴は，先述の通りアカデミズムでの受容と，在野知識人の受容とが同時に起こっていた点にある．そこで，哲学専門誌における受容と，それ以外の一般の出版物とのあいだに傾向の差異が認められるかどうかをテキストマイニングの手法で分析した．

まず，流行全体の時期と傾向を調べるため，国立国会図書館の NDL ONLINE で「ベルグソン」（当時のカタカナ表記）で検索をかけ，タイトルに入っている論文，書籍数を数えた（表 1）．日本語の文献では、先述した 1910 年の西田幾多郎の論文「ベルグソンの哲學的方法論」をはじめとして 1910 年代前半に多くの論文や単行本，ベルクソン著作の翻訳書が刊行されていることがわかる。出版点数は 1913，14 年に一度ピークを迎え，以降徐々に減っていく傾向にある．今回の研究では，本邦におけるベルクソン受容初期の流行期の様相を捉えることが目的であるため，検討の範囲を 1910～15 年頃までとすることにした [ii]．

表 1　国立国会図書館（NDL ONLINE）に登録された「ベルグソン」関連資料数（1910～1920 年，日本語文献のみ）
Table 1 Number of documents related to "Bergson" registered in the National Diet Library (1910-1920, Japanese documents only)

出版年	「ベルグソン」関連文献数
1910 M43	1
1911 M44	5
1912 M45/T1	15
1913 T2	29
1914 T3	32
1915 T4	11
1916 T5	9
1917 T6	10
1918 T7	4
1919 T8	7
1920 T9	4

次いで，検討範囲とする年代の範囲内で，分析の対象となる論文を選定し，対象を 2 つのグループに分けた．

第一のグループ（A 群）はアカデミズムでの受容を検討するために 13 報の論文を選定した．まず，1910，11 年に相次いで発表された西田幾多郎によるベルクソン紹介論文 2 報，そして東京帝国大学の文学部哲学研究室を母体とする「哲学会」が発行していた『哲學雑誌』に掲載された論文のうち，1911 年から 1914 年までに「ベルグソン」をタイトルに含み，主題的に論じている論文 9 報，そして，京都帝国大学文学部が母体となっていた京都文学会が発行していた雑誌『藝文』に掲載された論文 2 報を対象とした．

第二のグループ（B 群）は，在野の知識人，批評家たちによる受容を検討するための対象として，ベルクソンを主題とした概説書 6 冊を選定した．これらの概説書を対象とした理由は，ベルクソンの全体像を書籍というまとまった形で扱っていることから，当時の受容の特徴が掴みやすいと考えたためである．また，論文も対象に含めると，同じ著者らが書いた論文と書籍を分析することになり，内容の重複が生じることも考えられた．そのため，ベルクソン流行期に出版されたもので，ベルクソン全体を論じていたものを選んだ．

[i] 宮山[3], p.3.

[ii] 宮山[2]は，日本で最初のベルクソン紹介文は 1908 年の吉田熊次によるものだと報告している．

©2022 Information Processing Society of Japan

A 群 専門哲学者によるベルクソン関連論文（108,761 文字）

1. 西田幾多郎(1910)「ベルグソンの哲学的方法論」，『藝文』1 巻 8 号
2. 西田幾多郎(1911)「ベルグソンの純粋持続」，『教育哲学界』「臨時増刊最近学芸大観」
3. 小山鞆繪(1911)「批評紹介 ベルグソンの「時間と自由意志」」『哲學雑誌』26 巻 297 号
4. 小山鞆繪(1911)「批評紹介 ベルグソンの「時間と自由意志」『哲學雑誌』26 巻 298 号
5. 小山鞆繪(1912)「批評紹介 ベルグソンの「時間と自由意志」完」『哲學雑誌』27 巻 299 号
6. 米田庄太郎(1912)「タールドとベルグソン」『藝文』 3 巻 5 号
7. 鷲尾正五郎(1912)「論説ベルグソンの「虚無」の批評につきて」『哲學雑誌』27 巻 304 号
8. 小笠原秀實（1912）「ベルグソン直觀説の評價」『藝文』 3 巻 12 号
9. 福井晋太郎（1913）「批評紹介 ステワルト氏のベルグソン哲學批評」『哲學雑誌』28 巻 313 号
10. 福井晋太郎（1913）「批評紹介 ステワルト氏のベルグソン哲學批評（完）」『哲學雑誌』28 巻 314 号
11. 鷲尾正五郎（1913）「論説 ベルグソンの時と運動の批評につきて」『哲學雑誌』28 巻 318 号
12. 三宅雄二郎（1914）「ベルグソン哲学概評」『哲學雑誌』29 巻 323 号
13. 得能文（1914）「ベルグソン哲学の背景及び實際的傾向」『哲學雑誌』29 巻 323 号

B 群 在野知識人によるベルクソン解説書（663,464 字）

1. 野村隈畔(1914)『ベルグソンと現代思潮』
2. 稲毛詛風（1914）『オイッケン，ベルグソン哲学講話』
3. 稲毛詛風，市川虚山(1914)『ベルグソン哲学の真髄』
4. 中沢臨川(1914)『ベルグソン』
5. 三浦哲郎（1914）『ベルグソンの哲学』
6. 伊達源一郎(1915)『ベルグソン』

以降の研究手順は以下の通りである．

(1) 資料の入手

分析対象とする資料は，主に「国立国会図書館デジタルコレクション」[iii]から入手した．インターネット公開されているものは PDF 形式でダウンロードし，国会図書館内限定公開等のものは国会図書館内でプリントアウトした．一部は，図書館に収蔵されている資料を著者自身が複写した．複写と PDF 化によって，画像の鮮明さに差が生じ，後述するように OCR 後のテキストの精度にもばらつきが現れることとなった．

西田幾多郎の論文（A 群 1,2）に関しては，岩波文庫で現在も刊行されている西田幾多郎著『思索と体験』に再録されているものを PDF 化した．そのため，新字体に変更されており，なおかつ画像が鮮明で，OCR 後のテキストの精度も高い．

(2) PDF ファイル化

印刷された状態で入手した資料はスキャンを行い，PDF ファイルとした（機材は富士通の ScanSnap iX500 を利用した）．

(3) OCR

PDF ファイル化した文書群に対して，OCR をかけた．国立国会図書館が 2022 年 4 月に公開した OCR プログラム「NDLOCR」を利用した[iv][12]．縦書きで旧字体も混じる大正時代の文書は，ABBYY 社製のソフトや PDF 編集ソフト AdobeAcrobat に付属する OCR では殆ど文字認識できなかったが，NDLOCR ではより高い精度で読みとることができ，比較的可読性の高いテキストが得られた．

(4) クリーニング

OCR によって認識されたテキストを，原本の PDF ファイルと見比べ，目視によって誤認識された部分のクリーニングを行った．NDLOCR の精度は，元のテキスト画像の鮮明さに左右され，良好な場合は目視によるクリーニングが殆ど必要ないものもあった．画像の状況によっては OCR が機能せず，全文の再入力をしなければならない状態のものもあった．作業時間の制約から，すべての文書に完璧なクリーニングを行うことはできなかったため，哲学における重要概念（觀念，持續，直觀，意識，記憶など）の誤認識のみを重点的に検索と目視で修正した．

(5) テキストマイニング

A 群，B 群のテキストを，それぞれ 1 つのテキストファイルにまとめた．それらのファイルを KH Coder に読み込み，語の出現頻度を A 群と B 群で比較した．前処理の語句分割をする際には，旧字体の哲学用語（「持續」など）を含む強制抽出語をリストにして読み込んだ．

[iii] 国立国会図書館デジタルコレクションでの検索にあたっては，大正期に用いられたカナ表記「ベルグソン」を主に利用した． https://dl.ndl.go.jp/

[iv] NDLOCR は下記 Web サイトで公開されている。https://lab.ndl.go.jp/news/2022/2022-04-25/
上記プログラムの利用にあたっては，東京大学史料編纂所の中村覚氏が，Google Collaboratory 上での実行例をまとめたブログ記事とノートブックをいち早く公開しており，それを参考にすることでスムーズに利用法を理解し，実行することができた．今回の研究では，中村氏が公開しているノートブックを利用し OCR を実行した．URL は以下の通りである（URL は 2022/10/22 確認）
https://zenn.dev/nakamura196/articles/b6712981af3384

©2022 Information Processing Society of Japan

５．分析結果

KH Coder で，旧字体の哲学用語を強制抽出語として設定し，前処理を行った段階で，各群の語数は表 2 のようになった．

表 2　抽出された語数
Table 2 Number of words extracted

	総抽出語数（使用）	異なり語数（使用）
A 群	74,466（32,114）	5,448（4,737）
B 群	452,105(197,322)	12,034(10,745)

抽出された語彙のうち，「我等」「吾人」などの人称代名詞は削除した．そして，旧字体と新字体の異なり（「實在」と「実在」など）については，目視と検索によって出現数の多い方に寄せた．

表 3 各群の頻出語彙（上位 20 件）
Table 3 Frequent vocabulary for each group (top 20)

	A 群			B 群		
順位	語句	出現回数	相対頻度	語句	出現回数	相対頻度
1	空間	130	0.405%	哲學	2174	1.102%
2	叡智	122	0.380%	生活	1183	0.600%
3	状態	115	0.358%	生命	1179	0.598%
4	実在	109	0.339%	實在	1152	0.584%
5	物質	105	0.327%	自由	737	0.374%
6	性質	96	0.299%	意識	690	0.350%
7	時間	96	0.299%	科學	687	0.348%
8	存在	95	0.296%	物質	582	0.295%
9	自由	86	0.268%	精神	541	0.274%
10	同一	77	0.240%	進化	537	0.272%
11	思想	74	0.230%	持續	526	0.267%
12	生活	70	0.218%	主義	520	0.264%
13	活動	69	0.215%	世界	514	0.260%
14	作用	67	0.209%	思想	505	0.256%
15	説明	66	0.206%	經驗	482	0.244%
16	運動	65	0.202%	創造	471	0.239%
17	人間	64	0.199%	存在	467	0.237%
18	知識	62	0.193%	意味	449	0.228%
19	精神	60	0.187%	變化	440	0.223%
20	方法	60	0.187%	状態	423	0.214%

以上のような処理をした上で，A 群と B 群で出現回数が多かった語彙（名詞，サ変名詞，形容動詞，副詞，強制抽出語の総合）を，降順で並べ替えた結果，表 3 の通りであった．

また，人名も目視によって抽出し，リストアップを行った．人名は表記揺れと OCR 時の誤認識によって，同一人物が別の表記として取り出されているものが多く見られた（プラトンとプラトーン，ウィンデルバントとウキンデルバントなど）．そこで，現代で一般的な表記に名寄せし，出現回数降順で並び替えた．人名の頻出上位 12 件を示したのが表 4 である．

B 群のほうがテキストの分量が多く，A 群より使用語数において 6 倍程度の差があるため，表 3，表 4 のいずれにおいても，出現回数に加えて，使用語数を母数とした相対的な頻度も表示した．

表 4 言及される人名（上位 12 件）
Table 4 Names of people mentioned (top 12)

	A 群			B 群		
順位	語彙	出現回数	相対頻度	語彙	出現回数	相対頻度
1	ベルグソン	346	1.077%	ベルグソン	1368	0.693%
2	カント	53	0.165%	オイケン	247	0.125%
3	ラヴジョイ	13	0.040%	カント	211	0.107%
4	ジェームズ	10	0.031%	ジエームズ	48	0.024%
5	フェヒナー	9	0.028%	ヘーゲル	24	0.012%
6	クザン	8	0.025%	ヘラクレイトス	20	0.010%
7	ウィンデルバンド	6	0.019%	プラトン	18	0.009%
8	ステワルト	6	0.019%	コント	17	0.009%
9	フイエー	5	0.016%	トマス	14	0.007%
10	ブートルー	5	0.016%	ニーチェ	14	0.007%
11	オイケン	4	0.012%	フィヒテ	10	0.005%
12	コント	4	0.012%	ライプニッツ	10	0.005%

６．考察

表 3 に示された頻出語彙をみると，哲学専門誌掲載論文からなる A 群には，「空間」「実在」「物質」「時間」「存在」など，哲学分野における基本的な語彙が頻出する．「空間」「時間」はカント哲学の用語でもあり，新カント派への対抗としてベルクソン流行が生じたという宮山の指摘と

©2022 Information Processing Society of Japan

も整合していると言える．アカデミアの研究者たちは，従前から盛んに研究されていたカント哲学を踏まえながら，フランスからの新しい思想潮流であったベルクソンを捉えていたと推測することができる．

一方，在野知識人の書籍からなる B 群では「哲學」という一般名詞を除けば，「生活」「生命」という語が突出していることが目を引く．ベルクソンには，1910 年の時点で，代表作として『時間と自由』（1889）『物質と記憶』（1895）『創造的進化』（1907）という三つの著作があるが（括弧内は原著刊行年）[v]，「生命」という語や，「進化」は，『創造的進化』で論じられる概念である．在野の思想家たちが，『創造的進化』に特に注目していたことがうかがえる[vi]．

加えて，『時間と自由』というベルクソン最初期の代表作における重要概念である「自由」「持続（持續）」なども上位に出現している．しかし、興味深いのは，同じく『時間と自由』で主題的に論じられる「空間」「時間」の語は上位に登場していないことである．「時間」は B 群では 26 位（相対頻度 0.189%），「空間」は 37 位（同 0.160%）にならないと登場しない．ベルクソンは『時間と自由』において，「空間」と「時間」という伝統的な哲学的概念を用い，その内実を分析することで独自の時間論である「持続」の概念を導き出した．そのため，「持続」の概念を正確に説明するためには「空間」と「時間」への言及も多くなるはずである．しかし，「空間」，「時間」の登場頻度の少なさからすると，在野の批評家たちは，持続には強く着目するものの，それに到り着いた論理には強い注目はしていなかったのではないかということが推測できる．これは，A 群で「空間」が 1 位（相対頻度 0.405%）であり「時間」が 7 位（同 0.299%）であることと対照的である．

表 4 の「言及される人名」の違いも検討しておこう．目につく両者の違いとして，A 群ではカントの登場回数が突出しているが，B 群ではオイケン（当時論壇で流行していたドイツの哲学者ルドルフ・オイケン）がトップという点が挙げられる．A 群ではそのほかに，同時代のアメリカの哲学史家であるアーサー・O・ラヴジョイや，ベルクソン自身も言及している哲学者ウィリアム・ジェームズ，物理学者グスタフ・フェヒナーといった名前が挙がる．7 位に登場しているウィンデルバントは，新カント派のドイツの哲学者である．挙がっている名前を見ると，日本という極東の地にありながら，20 世紀初頭の西洋哲学界の最先端の研究状況をほぼタイムラグなくフォローしていた研究者たちの姿が浮かびあがる．アカデミアにおけるベルクソン受容は，当時の哲学界の概念布置のなかに，ベルクソン思想を位置づけていくという正統的な仕方でなされていたのだと推測される．

一方で，B 群においては，オイケンとほぼ同率でカントも出てくるものの，それ以外の頻出の人名は古代ギリシャ（プラトン，ヘラクレイトス）から中世の哲学者（トマス），ドイツ観念論の哲学者たち（ヘーゲル，フィヒテ），ジェームズ，ニーチェと幅広い．そして B 群には，いわゆる新カント派とされる哲学者の名前は上位には登場しない．在野の批評家たちは，ベルクソンをカントや新カント派との対照のなかで読むだけではなく，広く西洋哲学のさまざまな思想家と結び付けながら論じていると推測できる．

以上を踏まえ，宮山の研究と比較すると，たしかにカントへの言及が両者であるものの，言及の頻度はアカデミズムのほうが顕著である．表 3 で示されるように，語彙をみても，A 群にはカント的な哲学用語も多く見られる．それに対して，(1) B 群の著作にはカント哲学用語でもある「空間」「時間」といった伝統的な哲学概念が上位には登場していない点や（2）カントよりもオイケンの登場回数が多いことなどを考慮すると，在野批評家のベルクソン受容では，新カント派に対する対抗が大きな理由ではなかった可能性がある．在野批評家たちは，当時の哲学的な概念布置のなかでベルクソンを理解しようとしたわけではなく，何か別の関心で，ベルクソン思想に感化され，受容していたとみるほうが自然である．その関心とは何か，という点は，今後さらに検討していく必要があるが，「生活」や「生命」への言及の多さは一つの手がかりになるだろう[vii]．

---

[v] 日本におけるベルクソン関連文献の目録を作成した郡司良夫[10]によれば，1910 年代のベルクソンの主著の邦訳書の出版状況は次のようになる．1913 年『創造的進化』（金子馬治，桂井当之助訳），1914 年『物質と記憶』（高橋里美訳），『時間と自由意志』（北昷吉による解説付き抄訳）．1914 年頃には，当時フランスで刊行されていた主著 3 冊の翻訳や抄訳が，日本語で読める状況だった．

[vi] 「生命」と「生活」は，いずれもフランス語の vie という単語の翻訳として考えられる語であり，論者間による訳語揺れの可能性も検討した．しかし，文献中の用例を見ると哲学的な用語としての生命と，人間が生きることという意味での生活が使い分けられている傾向が見られたため，特別な処理はせずそのまま両者を別の語として扱った．

[vii] ベルクソン受容における「生命」や「生活」への注目は，大正時代の思想潮流全体とも呼応する．日本文学研究の分野では，鈴木貞美[11]が大正時代の作品に「生命」の語と観念が横溢していたと指摘する．藤田正勝[12]はその指摘を踏まえ，哲学思想分野においても「生命」への関心の高まりがあったと論じ，ベルクソンの流行に言及している．今回の研究の結果はこれらの指摘を裏付け，とりわけ在野において「生命」への関心が顕著であっ

©2022 Information Processing Society of Japan

7．まとめ：課題と展望

以上，宮山の研究を手引きとして，アカデミズムと在野でのベルクソン受容の関心の違いを探ってきた．新カント派に対抗してベルクソンが受容されたという宮山の解釈に対して，少なくとも在野批評家たちにおいては，そうではなかった可能性があるという帰結を導き出すことができた．テキストマイニングによる頻出語の分析という遠読の手法と，ベルクソン思想そのものについての知識を掛け合わせることで，今後の研究に資する仮説を提示するという一つの研究モデルを構築することができたと思われる。

しかし，今回の研究を通して，方法論的な課題も幾つか浮かび挙がってきた．それについて最後に整理しておきたい．

1）サンプルの偏りの問題

今回の研究で分析対象とした A 群の諸論文は，当時の海外のベルクソンを主題とした論文を翻訳しつつ紹介するレビュー論文も含まれており，主題が偏っていることは否定できない．たとえば，ベルクソン哲学用語としては重要語とは思われない「叡智」（intelligence の翻訳語）が，上位に入っていることなどは，その偏りを表していると考えられる．大正期のベルクソン流行においては，学術界での受容が，在野での受容より相対的にテキストの分量が少ないため，この時期のテキストに限るとこのような偏りが出てきてしまう．学術界での受容に関しては，1910 年からの数年間という短い期間だけでなく，この後の受容も追って検討していく必要があるだろう．

2）翻訳語の問題

今回は，フランス語で書かれた哲学書が日本でどのように受容されたかを検討したが，テキストにおいて翻訳語の選択がどのようになされているのかを把握することはテキストマイニングにおいて非常に重要である．翻訳語が異なることで，重要概念が複数の語として表現され，頻度上位に現れないことが考えられるからである．今回は，重要概念においては目視で翻訳語の揺れがないかを可能な限り確認したが，訳語の揺れの影響を完全に排除できたとは言いがたい．

しかし，この訳語揺れを逆に利用することで，思想家がどのような影響関係のもとで自身の思想を彫琢したかを辿ることも可能かもしれない．一般に思想家は，使用する語を翻訳語も含め厳密に選定していると考えられるため，著者ごとに概念語のグロッサリーを作成することが可能である．それらを比較することで、研究者同士の影響関係を明らかにすることもできるかもしれない。この点も含めて，今後検討していきたい．

3) 電子テキスト作成コストの問題

今回の研究で，もっとも時間がかかったのは，KH Coder での分析に至る前のテキストの電子化の過程であった． OCR がうまく機能するかどうかは，素材となる画像ファイルの鮮明さに左右された．そのため，素材となる文献の複写を鮮明に行う必要があるが，合綴された 100 年程度前の製本雑誌は物理的に本を大きく開けず，複写自体が困難で、カビ等の汚れで判読できない状態のものもあった．保存状態にばらつきのある原物資料から，自力で電子テキストを作成することには膨大な労力を要した．そして，OCR をかけた後も，本稿 4 節でも触れたとおり，完璧なクリーニングをかけることは時間的な制約から難しかった．

今後，テキストマイニングを用いて，埋もれた思想家たちの文献を研究していく場合には，電子テキストの製作の段階でかなりの物理的な労力が必要であることが考えられる．そのコストを最小限にするために，どのテキストを電子化すべきかの選定が重要となるだろう．分析対象の選択が，分析結果も左右していくことになるため，テキストマイニングを用いた研究において，どのように研究をデザインし，どのように研究資源を配分していくことが望ましいのかといった，研究設計方法の検討も必要であるだろう．

参考文献

[1] 夏目漱石「私の個人主義」(1914) ,青空文庫にて閲覧. https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/card772.html

[2] 宮山 昌治：大正期におけるベルクソン哲学の受容，人文, Vol.4, pp.83-104(2006)

[3] 宮山 昌治：純粋持続の効用 ：大正期ベルクソニスムと戦争，成城文藝，Vol.169，pp.1-21 (2000)

[4] 舩山 信 一：大正哲学史研究，こぶし書房(1999)

[5] Moretti Franco，フランコ・モレッティ，秋草 俊一郎・今井 亮一(翻訳)ほか：遠読 ：「世界文学システム」への挑戦，みすず書房(2016)

[6] 速水融，小嶋美代子: 大正デモグラフィ：歴史人口学で見た狭間の時代，文藝春秋(2004).

[7] 柴野京子: 書棚と平台：出版流通というメディア，弘文堂 (2009)

[8] 西田幾多郎：ベルグソンの哲学的方法論，思索と体験，岩波書店, pp.124-134, (1980)

[9] 九鬼 周造: Bergson au Japon（日本におけるベルクソン），坂本賢三(翻訳)，九鬼周造全集，第 1 巻，岩波書店 (1980)

[10] 郡司 良 夫: ベルクソン書誌：日本における研究の展開，金沢文圃閣 (2007)

[11] 鈴木貞美:「大正生命主義」とは何か，大正生命主義と現代，河出書房新社, pp.2-15, (1995)

[12] 藤田正勝: 日本哲学史，昭和堂(2018)

[13] 飯田泰三: 対象知識人の思想風景：「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ，法政大学出版局(2017)

たことを示すものである．なお，今回の分析対象であった在野批評家の野村隈畔や中澤臨川は，飯田泰三[13]が大正知識人の一角と位置づけて論じている．

©2022 Information Processing Society of Japan